

葛 卷 義 敏 編

芥川龍之介未定稿集

岩 波 書 店 刊

芥川龍之介未定稿集

昭和四十三年二月十三日 第一刷発行 ©

定価九百円

編者 葛巻義敏

発行者 岩波雄二郎

発行所 株式会社 岩波書店
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

精興社印刷・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

この一巻を昭和二年版当時の全集編集担当者たち 今
亡い堀辰雄 佐佐木茂索 現存の先輩小島政二郎の各氏
に捧げ、また彼を愛するすべての人たちの前に捧げる

はじめに

この一卷は、その一、二の物を除いて、ほとんどが、芥川龍之介の未発表未定稿である。考える迄もなく、彼が死んでから、もう四十年になる。昭和二年、当時の編集担当、佐佐木茂索、小島政二郎の二先輩と堀辰雄との四人で、毎日岩波書店（現在の信山社）の階上の編集室に通い、別冊を含めて芥川龍之介全集（第一回全八巻）の編集・校正を了えてからも、もう三十七、八年の月日が過ぎる。その後、更に昭和九年普及版全集を、堀辰雄君と編者の二人が主になり、佐佐木茂索氏の後ろ見を受けて、刊行してからでさえも、最早、三十年の余を過ぎた。その後、戦後に、中村真一郎君監修のもとにその新書判全集が刊行されてゐる。——それからもう十年の余は過ぎた。それらの各版全集ごとに編者にはいろいろの忘れ難い憶い出があるが、いまは唯それらのすべてが懐しい感情を以て思い出されるだけである。

これらの未定稿集の編集・刊行のことを編者等が思いついたのは、もう幾年前になるか。それらのさりげなく思い立ったのを勘定に入れば、はるか戦争の以前になるかも知れない。せめては、その当時の九年版全集に、その時々気づいた事や新しい資料の所在を記して置けば、何時かは役

立つかも知れない。——これが昭和十七年四月、単行本「或阿呆の一生」を岩波書店から刊行した当時の想いだった。（それは様々の削除を強いられ、なお発売禁止になる事さえも、当事者全員の覚悟の上で出版した、唯一の戦争中の彼の著書だった。）それ以後、彼の著作集は各出版社の企画に入っても、戦争中は何時も、情報局の事前検閲で、許されなかった。——われわれは、せめてわれわれの手がけた、それらの全集への愛しみから、さまざまな疑問や増補・訂正を持ちより、わずかに各所蔵の本に書入れをのこすのみで、それが何時かは役立つかも知れないのを俟つより仕方がなかった。——それが戦後となり、慌しい生活の中で、十年も経ないうちに、編集担当の一人、堀辰雄君が、先ず信濃追分で急に亡くなった。ごく最近では、あれほど彼を愛していた、編者には先輩の佐佐木茂索氏も遂に亡くなってしまった。当時の担当者としては、編者のほか、只一人、同じ先輩小島政二郎氏を残すだけとなった。——編者もまた、一生をひよわく、とかく病間に過ごしている。従って、編者一人で、これらの編集の実際の仕事に取りかかったのも、もう数年前になるにもかかわらず、今日、このような一巻をしか作り得ないことに、編者は自らの力の足らなさを感じ、なおその病弱だったこれまでの生涯にも、多少のさみしさを感じていないわけではない。——編者は曾て、この「優良模範児」であった彼に、はげしい反感を抱き、それに事ごとに反対しつつ来てたが、或偶然の機会からとつぜん彼の本体らしいものを知り、恐らく、唯一無二の叔父甥の仲となってしまう。（これは当然、世の人々の解するような叔父甥関係ではなく、——何時も、平氣

でその最後でさえも、常談口を叩き合っている、不思議な「はにかみ」を、お互に持っている生活であった。）——しかし、彼を伝えることを、彼が何故そう在らなければならなかったかというところを、その万分の一でも、人々に伝えたいと思う信念には、今も昔も変りはなかった。（それは一種の情熱でさえもある。）それらの根本を解く鍵としても、編者はこれらの「未定稿」類の全部を知ろうとしたのである。それらの半ばも、いま編集を了えたこの書が充分にとき明かし切れなかったのを、編者は感じつつある。が、ともかくも何等かの彼に対する、また彼がそのようにひとびとにしむけた、ある誤解の一をでも解くヒントになる事を希いつつ、これを世に送るのである。大方の読者は、この編者の心を諒とせられたいのである。なお、この書の編集にあたった数年間、あらゆる便宜を与えられ、その我儘な編集ぶりを許してくれた岩波書店、並びに、その間の経済的生活を支えてくれた岩森亀一氏の名をここに併記しておきたい。その他一々名は記さないが、編者によき数人の友人と知人との援助のあった事は、勿論である。

最後にもう一度、くり返し述べるが、今日、芥川龍之介はなお多くの人々から愛され、好意を抱かれてもいるらしいが、それらの抱かれてゐる愛情なり、好意なりの持つ、ある不安定性を消すうえに、何かの役割を、この書が果たすことのみを、編者は祈っているだけである。彼には、もっと烈しい精神があった。——彼がもし、人々から愛され、憐れまれ、好意を抱かれることだけに安住できたならば、あのように異常な生涯の閉じ方もしなかったのではなかったか、というような事が、

この頃しきりに思われてならないのである。

一九六七年春

葛 卷 義 敏

凡 例

一、本文は出来るだけ原文に忠実であるように努めたが、集中幾篇か、断片を合成編集したものもある。その場合は編者の見解によって文章を訂した。

一、本文のルビはすべて芥川の附けたものであるが、仮名づかいの誤りは正した。

一、脱字・脱落と思われる所は、編者が「」をもって推定補足したが、推定しがたいものは〔何字不明〕〔何字分欠〕等と記入し、また誤字・誤記の類はその右側に傍書して誤りを示し、推定しがたいものは同じく右側に〔原〕〔マ〕等と傍記した。

目次

はじめに

凡例

人を殺したかしら？	一
續「古千屋」	二四
「或阿呆の一生」別稿	三〇
晩年未定稿斷片	四〇
神田驛頭—Sさん、T君—紫山—彼女—晩秋	
秋別稿	五〇
くりすとはろ上人	五五
Karl Schatzmeyerと自分	六六
粉雪	一三
老狂人	二六

死相	一五
未定稿戯曲斷片	一四一
黑板を消すところで終る戯曲——帽子を追つかける	
女親	一四六
基督に關する斷片	一五〇
金瓶梅	一五四
弘法大師御利生記	一六二
SPHINX (a farce)	一六六
戰遮(斷片)	一七五
王嬌(斷片)	一七五
槍ヶ岳紀行	一八〇
丹波山・上諏訪・淺間行	一八四
勝浦にて	一八三
紀行・日記(斷片)	一七〇

目 次

奈良―水郷記―銚子行―佐原行―日光行―日誌―車窓所見―赤城山―明
治四十四年の日記―軍艦金剛航海記

今 昔 三〇五

大村賢太郎氏 三〇九

辭書を讀む 三二一

青蓮院の庭 三二三

産 屋 三二五

大島敏夫のこと 三七

志賀直哉氏の短篇(斷片) 三九

別 稿 他 三五

一 夕 話(別稿)―雛(別稿)―お律の死(別稿)―素戔嗚尊(別稿)―袈裟御前の
獨白(斷片)―酒蟲(別稿)―全印度が……―Sさん、ゐますか(別稿)―シン
グ紹介―大正九年四月の文壇(別稿)―どつちがいちめられたかわからぬ(別
稿)

華表文 他 三六三

華表文―耕牧舍引き札文案―ヨーグルト廣告文案―追悼文―小林一茶他

—斷片語

VITA SEXUALIS 三七九

談話 四二三

夏目先生—新潟での座談會—文章論—好きな果物の話

初期の文章 四七

〔第一高等學校時代〕 菩提樹—ロレンゾオの戀物語—寒夜—斷章—讀孟子

—對米問題—梅花—菊

〔中學時代(一)〕 十八年目の誕生日……—近藤君を送る記—桂園一枝をよむ—

雜感—出師表を讀みて孔明を論ず—釋迦—夜行の記—長距離競走の記—

梧桐

〔中學時代(二)〕 編集を完了たる日に—前號批評—一學期柔道納會—十月二日

發火演習記事—明治四十二年十月廿三日、東京府立第三中學校 發火演習ノ

際芥川中隊長ヨリ發セラレタ命令

〔小學時代〕 暑中休暇中の日誌—彰仁親王薨ず—昆蟲採集記(一)—同(二)—春の

夕べ—長への命

詩 五七

俳句 五五

目次

[illegible]

人を殺したかしら？

——或畫家の話——

〔編者註——これは今日まで各版全集に、「夢」として発表されていた作品の増補改訂である。この小説は一番最後（昭和二年七月二十三日夜）に捨てられたとは云え、彼の一番最後の作品である。彼はその年の五月中旬から、東北・北海道・新潟の講演旅行に出た。（帰京したのはその月末近く、五月二十六、七日頃である。）この小説は、その旅行前から幾とおりかに書かれていた。——その一番最初のかたちは、極く短い。（晩年によく現れた三つ、或いは二つの作品を集めて一つの作品として発表されようとしたものらしい。その一部の断片はこの本文のあとに「二 昼」断片として掲げておいた。その「一」は今日まで各版全集に「題未定」小説（昭和九年版では第九卷二八五頁、新書判では第十五卷五五頁）として既に発表されて来ている。それが何時の間にか、この小説のみが「夢」「人を殺したかしら？——或畫家の話——」として独立し、或分量を持った作品として、その最後近くまでくり返し書きつがれることになった。）この作品に就いては、小説「人を殺したかしら？」として内田百閒氏と大阪毎日新聞の沢村幸夫氏とが書いている。内田百閒氏のは直かにその原稿の一部を読ませられた人として、かなり彼の最後に近い思い出を書いておられる。沢村幸夫氏のは東京日日新聞の記者からの聞き書きとして書かれているものだが、彼の死の一週間程まえ、作品を依頼しに行ったその記者の前で、何故か「人を殺したかしら？」という十数枚の作品を自ら破って棄てたというのである。（この東京日日新聞の人を知りたい。彼の晩年の口述筆記者であり、東京

日日新聞文芸部員で、彼の係りであつた沖本常吉氏は今日も郷里津和野で、彼の実父側に就いての特殊な研究を進め、この彼の最後の作品が「人を殺したかしら？」であることもよく知っておられるが、それをその面前で破棄したという東京日日記者については全然知っておられない。この小説は以上のような経緯を経て「昼」、「夢」、「人を殺したかしら？」と、その内容も題名も変えて行き、最後（七月二十三日夜）には捨てられた作品である。が、それらのばらばらにされた原稿は七月二十四日朝、彼の書齋と編者の部屋との間の三尺の廊下に「破棄」という赤インキ書きの原稿用紙を一枚上にして置かれてあつた。それで、昭和二年版の全集以来、別冊中に、われわれはその一枚々々を読み返しつなぎ合せて、「夢」未定稿として編集し直し、収録して来た。が、今度偶然の機会から、その最後だつたと思われる部分が発見されたのと同時に、その「夢」として編集し直した部分にも幾つかの欠陥があるのを発見した。たとえば（余りに種類が多かつたそれらの原稿を一々読み返し、つなぎ合せて行くわれわれの編集の過程で）最初「花束の代りに英字新聞のしごいたのを持ち、ちよつと両足を組み合せたまま、頸を傾けてゐるボオズをして」（昭和九年版第九卷二七六頁、新書判第八卷一〇八頁下段）いるモデルを、次の場面では「ぢつと部屋の間へ目をやつたなり、薄赤い絨氈の上に横は」（昭和九年版第九卷二七七頁、新書判第八卷一一〇頁上段）らせたりしていた。前のボオズは附録の「昼」の中のボオズに近く、恐らくは「夢」破棄原稿の中から取つたのであろう。後のは「人を殺したかしら？」原稿であらう。いま、これらの一々には触れないが、全体としてこの新しい原稿と、従来の「夢」原稿とではかなりに相違するところも出て来てしまつた。（と云つても、それらは二つとも完全に作者自身の書いたままには編集し切れてないかも知れない。いづれもわれわれの編者としてつなぎ合せて行く上の主観が入っているかも知れない。——今度の改変は、編者一人にその全部の責任がある。）

編者は昔、——もうそれは四十年前になる。——他の編集担当者ともども、この原稿を「夢」未定稿と

人を殺したかしら？

して編集したように、今また、これを編者一人の責任で「人を殺したかしら？」の未定稿の最後として編集した。その昔の編集担当者四人のうち、堀辰雄は既に亡くなってから十数年になり、先輩佐佐木茂索氏も既に亡くなってしまった。いまは残るのは先輩小島政二郎一人にしか過ぎない。これらの再編集の最後の仕事を終りながらも、編者は感慨なきを得ない。そのみではなく、この小説を最後の日近くまで、あれ程に幾度もくり返し書き直しつづけていた作者、彼を思うことも屢々なのである。それは未完成であり最後は捨てた作品であっても、その毎日ごとの努力を知っている編者はこの「人を殺したかしら？」一篇の未定稿を此処に再編集した。読者は、これらの作品の中にも、なお精進をつづけ、こころみていた真の彼の姿を認めてほしいと思うのだ。

その最後に入れられた、脱稿の日附かと思われる「(二・五・二六)」の日附について一言すれば、これは確かに脱稿日附と思われるが、この時、彼は東京にはいなかった。五月中旬から出かけた東北・北海道への講演旅行の帰り道に新潟高等学校で、最後の講演「ボオの一面」を講演している。とすれば、それは帰京匆忙にこの脱稿日附を旅行前に既に成っていた小説に書入れたにしろ、その日附は合わないことになる。とすれば、それは何だったろうか？——本当のところは編者にもよくわからないが、強いて想像するならば、その遺稿の一つとして発表された小説「歯車」の各章別につけられた、脱稿日附の異様な速度は、後に各編集担当者相談の上、除いたように(それは彼には何かの目的があったのか知れないが、)——少くも小説「歯車」に関する限りでは、——作られた日附だった。今度の再編集でもそれを一応除こうかと思わないではなかった。——が、いまはそれを残し、後日その意味を考えたいと思うのである。』

わたしはすっかり疲れてゐた。肩や頸の凝るのは勿論、不眠症も可也甚しかった。のみならず